

自立訓練における作業療法実践事例集

一般社団法人 日本作業療法士協会
制度対策部 障害保健福祉対策委員会

2020年6月

作業療法実践事例集について

障害者総合支援法の訓練等給付の中に、障害のある人が自立した日常生活または社会生活ができるよう、一定期間訓練・支援を行う自立訓練がある。自立訓練には、理学療法、作業療法その他必要なりハビリテーション、生活等に関する相談及び助言その他の必要な支援を行う機能訓練と、入浴、排せつ及び食事等に関する自立した日常生活を営むために必要な訓練、生活等に関する相談及び助言その他の必要な支援を行う生活訓練とがある。このうち機能訓練には作業療法士の配置が明記されており、その配置状況については当委員会で継続的に調査を行っているところであるが*、事業所数自体が他のサービスに比して少ないこともあり、機能訓練に関わる作業療法士の役割はあまり知られていない。一方、生活訓練はその対象者の例として、入所施設・病院を退所・退院した者であって、地域生活への移行を図る上で、生活能力の維持・向上などの支援が必要な者、と挙げられるように、対象者の生活機能を維持向上させ活動と参加に働きかける作業療法の機能と合致するところも大きく、少数ながら生活訓練に関与している作業療法士もいる。

そこで今回、医療と福祉の連携や福祉領域への介入意識を高めることを目的に、全国の作業療法士の協力を得て自立訓練での貴重な支援事例を集積整理し、障害福祉領域における作業療法の姿を示すことにした。本報告が自立訓練に携わる多くの方々の目に触れ、作業療法士の活用により利用者の活動と社会参加が推進されることを期待する。

* https://www.jaot.or.jp/files/page/wp-content/uploads/2018/06/seikatsukaigokinoukunren_OTPT_2017_1.pdf

実践事例 目次

機能訓練

- No. 1 自立訓練施設を経て就労に結び付いた事例 ～「できる」という達成感に着目して～
- No. 2 “復職”に向けて、複数の事業所がひとつとなって支援した事例
- No. 3 活動量が向上し、左股関節の痛みもなく過ごせるようになった事例

生活訓練

- No. 4 不安軽減したことで、自立通所ができるようになった事例
- No. 5 高次脳機能障害のある方の安定した地域生活を実現するための支援
- No. 6 介護から自立にむけて、交通手段を拡大していった事例
- No. 7 脳卒中後、高次脳機能障害を呈した事例への自動車運転再開支援
- No. 8 自己理解の深まりや他機関との連携により就労に向けたステップアップが可能となった事例
- No. 9 活動を通し自己理解を深められた事例
- No. 10 記憶障害に対し補完手段の定着を図った事例
- No. 11 働く経験が主観的ウィルビーイングに与える影響
- No. 12 生活のしづらさを可視化することで、趣味活動の再開や生活範囲の拡がりにつながった事例

※ 下線字は、各事例における支援キーワード

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

自立訓練施設を経て就労に結び付いた事例～「できる」という達成感に着目して～

【年齢・性別】 40歳代男性 【疾患名】 脳幹梗塞（受傷後2年8ヶ月経過） 【手帳等】 身体障害者手帳1級、障害年金1級

【初回評価・希望】 FIM：122/126（階段昇降・移動に減点）、高次脳機能障害無し。



四肢麻痺、複視あり。SARA日本語版：23点。倉庫設置や内装の社長（現在廃業）。

性格：不安・心配が常在し、自信低下しやすい。家族：妻、息子二人と同居。

COPM：就労の話は出るも、「できる仕事がないから働かなくてもいい。」と消極的。

	重要度	遂行度	満足度
①屋外歩行自立	10	1	1
②運転再開	10	1	1
③就労	2	1	7

【目標・計画】 自信が低下した事例に対し「できる」作業を発見し、成功体験を積み、段階的に就労の可能性を模索する。

【経過】

心身機能への介入

【実施内容】

- ・グループ訓練（2時間/1日）
- ・個別訓練（2回/週）
- ・外出訓練（2回）

【支援内容】

平地・坂道・屋外・外出訓練と達成可能な短期目標を設定し、徐々に自信の獲得が図れるよう声掛け・環境調整を実施。

【結 果】（介入91日目）

歩行による移動が完全自立となる

【発 言】

『長時間の移動は難しいけれど、連続2km程度ならば大丈夫。』



グループ訓練



外出訓練

運転再開支援

【実施内容】

- ・自動車運転評価
- ・自動車運転訓練（15回）
- ・路上教習（2回）

【支援内容】

右半身失調、感覚障害が重度
⇒ハンドルノブ、ウィンカー延長、踏み換え装置使用し運転訓練実施。
路上教習にて自宅周辺の走行を確認。

【結 果】（介入160日目）

適性検査実施し運転再開となる

【発 言】

『家の周りも移動できそうだ。でも運転は慎重に行いたい。』



自動車運転訓練



路上教習

就労に対する支援

【実施内容】

- ・作業評価、訓練
- ・就労実習
- ・一般企業との面談

【支援内容】

①・②⇒『就労継続支援B型事業所あゆみ』（以下、B型事業所）にて就労実習。
③⇒知人を頼りに企業（内装関連・リフォーム相談役として）と面談を実施。

【結 果】（介入201日目）

退所後B型事業所の利用決定。
次年度、障害者枠にて企業に就労予定。

【発 言】

『不安はあるが、やっていけそう。』



作業評価



就労実習

【結果】 2年就労中（R2.2月時点）

	重要度	遂行度	満足度
①屋外歩行自立	10	10	8
②運転再開	10	8	5
③就労	10	8	5

病前得意であったギター披露の機会を提案され演奏会を行った。

自信が低下していた

A氏は見られず、新たな

『自分らしさ』が見られた。



【まとめ】

歩行、運転と段階的な「できる」という成功体験が、就労の意欲を向上させる機会となり、成功体験に繋がった。

* 本事例報告掲載に対し、対象者からの了承を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

“復職”に向けて、複数の事業所がひとつとなって支援した事例

【年齢・性別】 50代男性	【疾患名】 くも膜下出血、てんかん、高次脳機能障害	【手帳等】 精神保健福祉手帳2級、要介護2
---------------	---------------------------	-----------------------

【対象者の背景】 病前はごみ処理工場でボイラー管理をしていた（休職中）。妻と2人暮らし。

【評価】 記憶力低下、遂行機能低下、注意力低下あり。「今でも仕事はできます。」との発言が聞かれ、車で仕事に行こうとする事もあるため、1人で留守番はできない。身体機能の著明な低下はなく、ADLは動作は自立。屋外は道に迷うため見守り。

【希望】 復職したい、体力をつけたい、肩と腰の痛みを減らしたい。

【目標】 復職する。通勤のために、体力をつけ、公共交通機関が利用できるようになる。自身の状況を理解する。

【実際の状況】

妻は仕事をしているため、ご本人の日中の居場所が必要であることから、複数のサービスを利用しながら、復職に向けて支援を行った。それぞれの事業所での大まかな役割分担は以下の通りである。

《当施設》公共交通機関の利用練習、職場に関すること（業務環境・内容確認、業務調整・提案、情報提供書作成）、復職訓練中の職場訪問、体力づくり。

《訪問リハビリ》自宅周辺でのリハビリ（体力・高次脳機能へのアプローチ）、実際の通勤時間に通勤訓練の実施。

《小規模多機能》日中の居場所、生活リズムの構築。

《介護支援専門員》介護保険サービスの調整。

《相談支援専門員》サービス間の連絡・調整、家族の状況把握、

《主治医》本人の状況確認、高次脳機能評価、主治医としての復職の可否判断。

担当者会議だけでなく、現状の様子の確認や今後の支援について、普段からお互いに連絡を取り連携をした。例えば、当施設で公共交通機関の単独利用が可能と判断したため、訪問リハビリで実際の通勤時間での訓練を実施し、行えることを確認をした。経過の中で、ご本人が復職に対して不安を感じるようになった。記憶が苦手なことを自覚したり、留守番ができるようになった。職場と家族の面談に同席し、病前の業務内容では高次脳機能面でのリスクが高いことから、配置転換が望ましいことや現状と対応を伝えた。結果、配置転換で復職訓練となった。復職訓練中の訪問時も、新たに行うことも覚えられ、特に問題はなく、職場の想定よりも業務が増える予定となっていた。復職訓練後半に産業医と面談をし、正式にフルタイムでの復職が決定した。

【結果・まとめ】 “復職”という1つの目標に向かって複数の事業所が連携した結果、復職が実現した。1人の方が様々なサービスを利用していても、他のサービス利用状況はわからない、という状況が多く、情報を提供して情報を求めても情報が共有されないことも多い。しかし、対象者によりよい支援を行うには、利用しているサービスやサービスの利用状況・目的をお互いに理解し合い、日頃から連携し合うことが大切であると考えます。

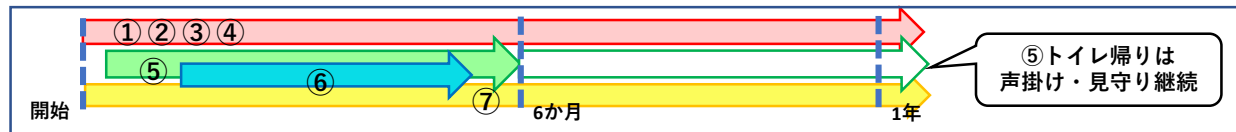
* 本事例報告掲載に対し、対象者からの了承を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

活動量が向上し、左股関節の痛みもなく過ごせるようになった事例

【年齢・性別】 30歳代・女性	【疾患名】 左大腿骨頭内側骨折、右恥骨・坐骨骨折、視覚障害	【手帳等】 身障手帳2級、支援区分4
【全体像】 母と2人暮らし。X年自宅で骨折。病院でのリハビリテーション終了後、在宅復帰し、生活介護通所サービスを利用し生活していた。運動する機会なく、活動性低下。体力をつけたいとの希望で、X年+7.5か月に当施設通所機能訓練利用開始となる。視覚障害(全盲)あり、移動は白杖使用し、自宅以外の場所は誘導必要。手術した左股関節に痛みあり。 【希望】 本人) 床からの立ち上がりが難しく不安がある。長距離の歩行は痛みや疲れが出てくるため体力をつけたい。 母) 機能や筋力が衰えないようにしてもらいたい。※通所週2日の希望。利用開始4か月後からは週4回の利用。 【評価】 股関節屈伸・外転・外旋、階段昇降時左股関節の痛みあり。下肢筋力は瞬発的な力は発揮できるが、持久力低下。歩行は直進難しく、蛇行歩行で施設内は誘導介助必要。過去脳腫瘍術後に右上下肢軽度麻痺残存するも、左右差ほぼなし		
【目標】 短期目標) 左股関節の痛みの軽減。歩行持久力の向上。階段昇降の安定。長期目標) 施設トイレ使用の自立を目指す。 【計画】 ①関節可動域訓練 ②筋力増強運動 ③歩行練習 ④階段昇降練習 ⑤トイレ移動練習 ⑥床からの立ち上がり練習 ⑦自主練習		

【介入・経過】



- ①関節可動域訓練、②筋力増強運動 ⇒ 運動後の動作では左股関節の痛み軽減。現在は動作時痛みなし。
 ③歩行練習は直進練習や障害物歩行を実施⇒歩行スピード向上。④階段昇降練習⇒二足一段から開始2か月で一足一段で可能に。
 ⑤施設内トイレへの移動自立を目指し誘導⇒声掛けで実施(他職種協働で通所時)⇒開始6か月で行きは見守り～自立で可能に。
 ⑥床からの立ち上がり練習⇒可能となり在宅でも不安なくできている。⑦自主練習は、集団体操や機械使用した練習を実施。

【結果・まとめ】 活動量・筋力の向上により、現在生活の中で左股関節の痛みはほぼなくなり、床上で座位・立ち座りも可能。在宅での入浴は床バスマット上で洗体等可能で自立。当施設から帰宅後や買い物後の疲労感はある。今後も継続して関わっていく。

* 本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

不安軽減したことで、自立通所ができるようになった事例

【年齢・性別】40歳代・男性	【疾患名】脳梗塞、高次脳機能障害	【手帳等】要支援1、精神3級
【全体像】 脳梗塞を2度発症後も独居の生活、交通事故をきっかけに70代両親と同居。ADLは動作自立しているが適宜声かけが必要であり、主体性が低い。家族に対して易怒的になる場面もある。生活の安定や働くことを目的に訓練を利用することとなる。		
【評価】 観察から常に声かけが必要な状態、面接から一人で行動することに対して漠然とした不安を本人・母親共に感じている。		
【希望】 本人) ①一人で通所したい②働きたい③言葉が出るようになりたい。COPMより 母) 自立した生活をしてほしい、働いてほしい。		
【目標】 長期) 今後の目標ができ、積極的に訓練に取り組むことができる。 短期) 自力通所ができる、目標を持って作業に取り組む、注意課題ミス軽減。		
【計画】 ①個別活動（本人にできる活動にし、難易度を調整する）②通所訓練③フィードバック（主に母親に対して）		

【介入・経過】
①個別活動（認知プリント、注意課題、知育玩具、音読課題等）：まずは当事業所に安定して通所できるよう本人に合わせた課題の難易度を設定する。また、スタッフに声をかける機会のある課題や目標を設定しやすい課題とする。徐々に、課題に対して目標を持って取り組み意欲的な姿勢が見られたり、スタッフへの声かけにためらう様子は減少していった。（施設では自立を促すために最小限の支援で日中過ごす取り組みをしている。） ②通所訓練：本人・母親の漠然として不安について傾聴し、肯定的な発言が得られた時点で、事業所～自宅までの帰宅時に同行する。実際の本人の様子を本人・母親にフィードバックを実施し、漠然とした不安を軽減した。 ③フィードバック：母親に対しては事業所内での様子を共有、母からも生活状態について情報を得る。関わり方についても助言をする。本人の漠然とした不安感に対しても傾聴と適宜客観的な意見を伝え不安を軽減できる関わりをした。
【結果・まとめ】 本人・母親とも不安が軽減でき、一人で通所ができるようになった。生活リズムが整った。生活の中で自己選択できるようになった。今後、より生活をしていく上での具体的な目標を立てられるよう支援したり、また、1日活動できるよう体力面の向上をしていく必要がある。 * 本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

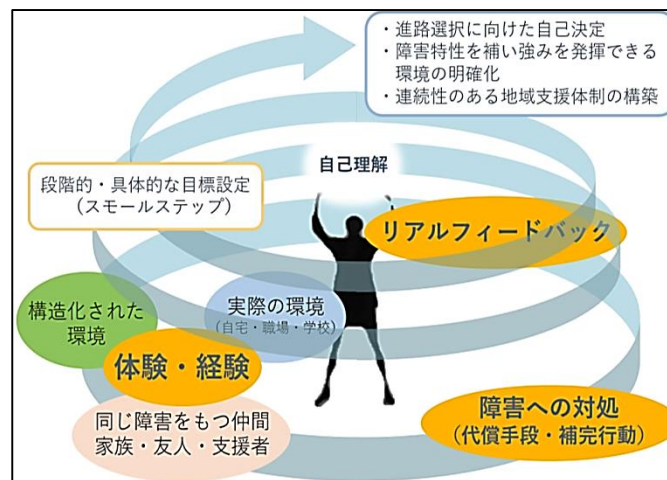
高次脳機能障害のある方の安定した地域生活を実現するための支援

【全体像・評価・希望】高次脳機能障害の診断を受け、生活の自立に向けた訓練を必要とする概ね18～65歳の方。平均年齢37.3歳、受傷・発症からの平均期間4.5年、原因疾患は外傷性脳損傷・脳血管障害・脳腫瘍等。医療機関からの紹介が多く就労へのニーズが高い。

【目標・計画】生活リズムの確立、スケジュール管理、生活管理能力（服薬や金銭の管理・身だしなみ・家事等）、社会生活技能（公共交通機関の利用・買い物等）、対人技能、作業力の向上を主な目的とする。作業療法士は、本人のニーズを踏まえ、認知機能・日常生活・社会生活・作業力・対人技能・心理面・環境面の包括的な評価と、障害の自己認識や職業準備性に基づく段階的な目標設定を行い、個別性の高いプログラムを提供する。

【介入・経過】

- ①集団訓練（朝夕の会・園芸・調理・メモ練習・作業手順訓練・グループワーク等）をベースに、個別訓練（日常生活訓練・就労準備訓練等）、訪問訓練（家庭・学校・施設・職場）を実施。
- ②作業療法士は、施設内及び自宅・職場などの場面で、障害を補いながら本人の強みを発揮するための環境調整を行うとともに、プログラムを通して、様々な体験や経験、リアルフィードバック（経験の中で直面した事実について、どうすればうまくいくかを振り返る）、障害への対処（手帳・手順書・アラーム等の代償手段、確認や休憩等の補完行動）、という一連のサイクルを繰り返しながら、本人の自己理解を深めていく。
- ③本人や家族、地域支援者・医療関係者等と話し合いながら、本人が希望する生活ができるよう日中活動を組み立てる。生活訓練終了後の進路（就労移行支援・就労継続支援A/B型・職業能力開発校への移行、職場や学校への復帰等）に向けて、実際の生活場面や移行先の環境で必要なサポートや配慮について引継ぎを行い、継続的な地域支援体制を構築する。



【結果・まとめ】

地域で安定した生活を継続するためには、安心できる環境と居場所づくり、障害の自己理解、本人のニーズに基づき生活全体を捉えること、地域支援体制の構築が重要となる。そのための作業療法士の役割として、生活課題とその背景要因を明確にするための包括的なアセスメント、環境調整を含む効率的な支援プログラムの立案及び実施、体験の場や機会づくり、専門的知識に基づく説明などがあり、医療と地域との円滑な連携に貢献することができる。

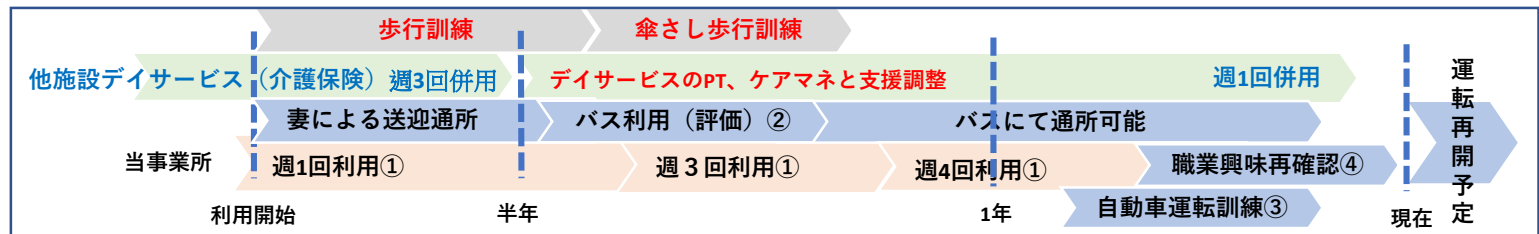
*本事例報告掲載に対し、施設からの了承を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

介護から自立に向けて、交通手段を拡大していった事例

【年齢・性別】 50歳代・男性	【疾患名】 脳出血（左視床出血）	【手帳等】 身体障害 4 級
【全体像】 妻との二人暮らし。身辺動作自立。発症前は飲食店を自営し、現在は閉店。妻の収入で生計を立てている。発症から当事業所利用までの1年間はデイサービスに週3回通所。右片麻痺（杖歩行）、構音障害あり。不安感が強く社会参加が進まない。機能回復への希望強い。 【希望】 調理経験を生かした仕事に付きたい、車の運転を再開したいとの希望で当事業所開始となる。 【評価】 COPM（希望,重要度,遂行度,満足度,）:働きたい10,1,1 車の運転10,1,1 杖無しで歩く10,3,3 交通量の多いところを歩く10,1,2 料理をする8,1,1、MMSE27/30、MOCA-J27/30、GSES8/16、AMPS:ADL運動0.1,ADL認知0.4、Br-Stage:上肢IV,下肢IV。		
【目標・計画】 長期：自分にあった働き方を見つけ、安定した社会生活を送ることができる。 短期：自分自身を知る、注意力などの機能を上げる、積極的にコミュニケーションをとる。		

【介入・経過】



- ①個別課題ではPC入力作業、組み立て作業や認知課題と、集団課題では運動や職業準備講座、マインドフルネス講座などを受講。疲労感が強く、休憩時に机に伏せている事が多い。
- ②就職及び社会参加の場を拡大を目的に公共交通機関の利用の評価を実施。セラピストが付添バスの乗降及びバス停までの移動動作を確認。能力的に可能であったが不安及びこれまで送迎されていたことも影響し、通所利用にバスをなかなか使えない状況が続いた。
- ③病院にて運転再開を希望を打診。主治医から許可がでるものの、本人が左上下肢による操作について不安があり一時運転再開を断念。ドライビングシミュレーターを使用、左上下肢による訓練を実施。本人の不安感が残ったものの後は実車でということとなり医師の再診察後に運転再開となる予定。
- ④職業興味を再確認。1年あまりをかけて自己能力の把握がすすみ現実的な職業選択をおこなう。

【結果・まとめ】 介入当初、機能回復への固執があった。介護保険サービスの利用から徐々に福祉サービスにシフトさせ、経時的に現状を受け止め自らの社会参加の手段を模索することとなった。自立の手段として家族による送迎から公共交通機関利用へとステップアップし、今後は自動車運転再開や就労といったさらなる可能性を広げている。

*本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
脳卒中後、高次脳機能障害を呈した事例への自動車運転再開支援			
【年齢・性別】 70歳代・男性	【疾患名】 アテローム血栓性脳梗塞	【手帳等】 なし	
【全体像】 妻、娘夫婦、孫と同居。頑固な性格。X年8月に脳梗塞発症し入院、3ヶ月後ご本人切望し自宅退院。元々、他県にある実家の管理をご本人が行っており、移動手段は車であった。実家に行く為に自動車運転再開の希望あり。高次脳機能障害の残存、病識低下がみられたことで困難と判断されるもご本人は納得しないまま、サービス利用せず家事や孫の世話をして約1年半過ごす。車を管理するご家族に暴言続き対応困難となり、運転再開に向けて当事業所の利用開始。 【希望】 本人）運転免許を再取得したい。実家に行き、掃除やお墓の整備をしたい。 家族）本人のやりたい事をさせてあげたい。 【評価】 明らかな麻痺なし。中等度～軽度の失語症あり、複雑な文章は理解不十分。自動車運転再開における検査項目¹⁾で、MMSE、TMT-B以外は基準値を満たす。情報処理速度や分配性注意機能は低下。			
【目標】 自動車運転を再開する。 【計画】 ①ドライビングシュミレーター（以下DS）②言語訓練③注意機能訓練④ご本人・ご家族への説明と情報共有⑤実車評価			
【介入・経過】（介入開始から①～③実施。④は適宜実施。⑤は介入から5か月後の予定） ①ハンドル操作、視野に大きな問題なし。反応検査で当初反応速度低下(約1.4秒)と誤反応(56回)を認めたが、徐々に誤反応は減少(5回)。カーブでの減速不十分さ、ハンドル操作でふらつき見られるも自覚あり、徐々に修正可能となった。危険予測体験コースでは、進行方向の指示の聞き間違いがあるも、危険予測し対処することは可能となり、事故の発生は減少。運転技能としては年齢相応と判断。 ②ST介入し、運転中の指示理解や同乗者との意思疎通の円滑さを向上させる目的で行った。3語文の聴理解や、計算、文レベルでの説明課題を実施。 ③二重課題や、注意の切り替え課題を主に行った。混乱もあるが、間違いには気付く事が出来た。 ④病識低下や元々の性格から、運転に対して「もうできる」と抑制がきかなくなる場面があった。その都度、運転再開までに必要な支援の流れや法律の説明、検査の基準値を示しての現状理解を促した。また途中経過の時点で運転をすることのリスクをご家族と共有し、ご家族がご本人の焦燥感に対して抑制を図るなど協力を得た。内服忘れがあることが判明し、全身状態の安定も必須であることを説明の上、事業所で服薬確認を行った。 ⑤ご家族の意思確認を行った後、自動車学校と連絡を取り、実車評価の日程調整を行った。同行予定。			
【結果・まとめ】 上記の介入を継続した結果、MMSE、TMT-Bにおいて点数改善がみられた。DS評価においても、運転技能や危険予測能力は年齢相応に備わっていると考え、実車評価の日程調整を行った。しかし失語症・注意障害の残存や、ご本人の自動車運転の目的を考慮すると、運転再開を目指すには環境調整や条件設定を行うことが必要である。運転中の会話を控える、同乗者を必須とする、ドライブレコーダーを設置する、夜間や高速道路の走行は控える、十分な休憩をとる。以上の条件が必要であるとの考えを主治医へ報告する。また介入を継続する中で、元々の性格や病識低下により抑制がきかなくなる場面が見受けられたが、具体的に基準値を示して現状理解を促すことや、ご家族と連携し協力を得ることで対応していくことができた。 * 本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。			

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

自己理解の深まりや他機関との連携により就労に向けたステップアップが可能となった事例 ～社会的行動障害を持つ高次脳機能障害者～

【年齢・性別】40歳代・男性	【疾患名】外傷性クモ膜下出血、多発性脳挫傷、高次脳機能障害（注意障害・記憶障害・遂行機能障害・社会的行動障害・病識欠如）	【手帳等】自立支援医療
----------------	--	-------------

【全体像】高齢の両親と3人暮らし（KP:別世帯の妹）、発症から当センター利用に至るまで約2年半以上を要した。ADLは自立だが、家事は主に母に依頼（自室のみ清掃実施）。当初、医師から自動車運転再開は危険と判断された。失業給付受給。

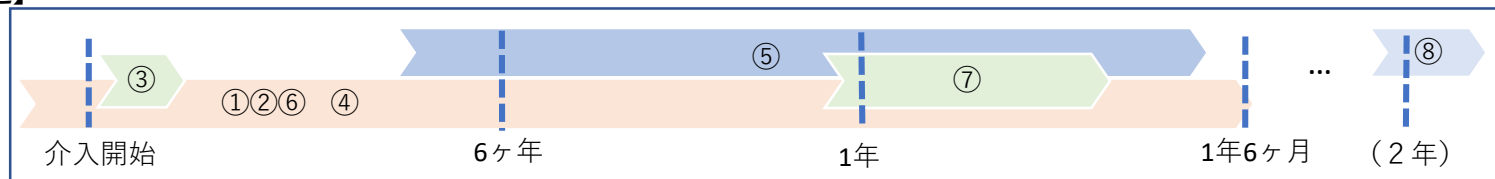
【希望】（「就労可能証明書」の診断を獲得し、）就職したい。

【評価】(1)複数注意性の作業でミス、(2)口頭指示に対し誤認や早合点が起きやすい、(3)効果的な計画立案が困難(4)自らの意見が通らないと声を荒げる（感情コントロール低下）、(5)症状を認めない（すぐに一般就労できていると思っている）。

【目標】就労に向けた日課管理や対人技能、作業耐久性の向上。障害理解を深め、就労支援につなげる。

【計画】①作業のフィードバック、②日課・時間管理練習、③公共交通機関の利用支援、④実務的作業機会の提供、⑤集団OT、⑥ホームワークの提供・管理、⑦担当者会議・情報共有、⑧退所後支援

【介入・経過】



①評価や課題のフィードバックを通して症状（対処法）を説明→徐々に注意・記憶障害等一部症状を自覚し、課題見直しの習慣がつきミスが減少。初期より冷静な行動がとれ、些細な事は怒らずに対応可、②メモリーノートの活用練習→メモ・ノートの活用機会が増加し、約10ヶ月後システム手帳へ、③自宅から当センター間の公共交通機関利用を評価。自立域と判断。週5日利用へ、④軽作業の提供と対処法の伝達→約10ヶ月後、PC作業追加。作業全般を時間管理へ、⑤約半年後、目標立案や討議、作品作り、外出訓練等の集団活動を行う、⑥ホームワークを日課に組込む。進捗状況をチェック→約10ヶ月後、自己管理へ、⑦家族・主治医を含め全関係者と担当者会議を実施→就労移行支援事業所と情報共有へ、⑧退所から約半年後、移行先の事業所から支援相談あり。本人とも面談。高次脳機能障害の講習会受講へ繋ぐ→その後：自動車運転再開。一般就労をチャレンジ（障害者職業センター利用も視野に準備）。

【結果・まとめ】就労に必要な要因を分析・介入し、リハの意味を徐々に理解してもらう中で機能回復と症状軽減に繋がった。一方、障害理解・折り合いをつけるのに発症から5年以上を要している。よって、就労は一事業所で支援完結を目指すのではなく、他（多）機関と「顔の見える」連携をする必要性が示唆された。

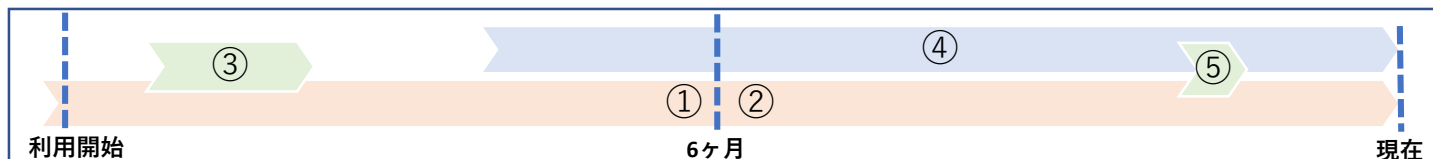
* 本事例報告掲載に対し、対象者からの了承を得ている。

【分類】	【分野】	【形態】	【内容】
機能訓練/生活訓練	身体/精神/知的/高次脳/その他	個別/集団/連携	生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他

活動を通し自己理解を深められた事例

【年齢・性別】40歳代・男性	【疾患名】低Na血症による高次脳機能障害	【手帳等】精神3級
【全体像】受傷後、1人暮らしから実家へ戻り両親とともに生活する。退院後6ヶ月、障害者・就業生活支援センターの紹介で見学・体験を経て利用開始。現在休職中。 【希望】面談、COPMより、「復職したい。その為に体力をつけないといけない」と語られた。家族からは仕事してほしい、障害の理解が不十分との話があった。 【評価】Moca-J22/30（想起課題、遅延再生減点）、MMSE28/30（遅延再生減点）。面談より記憶に関して苦手意識があること、復職する上での課題が分からないことが語られた。また、質問に対してすぐ「分からない」と答え、自分の考えを深め他者へ伝えることが苦手である印象を受けた。		
【目標】長期）復職する、短期）自己の課題を把握する メモを活用する 【計画】①認知課題、ワークサンプル幕張版など活動を提供、②面談やフィードバックを通した自己理解の促進、③課題への対策について助言、④会社との調整		

【介入・経過】



- ①認知リハプリント、知育ブロック、ワークサンプル幕張版：午前活動のベースとして提供。活動から自己の得意不得意を把握する。順調に難易度を上げ、5ヶ月後にはワークサンプルでのミスがほぼなくなる。
- ②集団プログラム：午後活動のベースとして提供。症状や健康などについての学習プログラム、調理、制作活動をグループで実施。
- ③聞き取り課題：読み上げられた内容について質問に答える。「集中できない」「気が周りに逸れる」と発言。症状の一つである注意障害について説明。
- ④職業研修：農業やA型事業所など実際の仕事の場、緊張感のある環境で活動。
- ※上記の活動を行い、客観的な視点から状況をフィードバックする。それに加えストレスを伝えることや課題に対するトレーニング法、代償法などを助言した。
- ⑤利用開始から10か月後に本人、病院、会社、当事業所での関係者会議を行い、復職するために必要なこと、条件、期限などについての具体的な確認を行った。

【結果・まとめ】①活動を通し作業の得意、不得意を体験する機会となった。②フィードバックや会社を含めた関係者会議を行ったことから、復職をする上での課題点など、自己理解を深め対策など自分で考え、実践、試行錯誤出来るようになった。③考えを深め、自分の意見や展望など他者へ伝えることが出来るようになった。

*本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

【分類】	【分野】	【形態】	【内容】
機能訓練/生活訓練	身体/精神/知的/高次脳/その他	個別/集団/連携	生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他

記憶障害に対し補完手段の定着を図った事例

【年齢・性別】 40歳代・女性	【疾患名】 右尾状核出血 脳室内出血	【手帳等】 精神保健福祉手帳2級 障害支援区分3
-----------------	--------------------	--------------------------

【全体像】 自発的な行動が少なく、職員の誘導にて訓練や生活活動を実施。居室から食堂・訓練室への移動は方角を迷い、誘導を要しているが拒否なく訓練参加することができる。

【評価】 神経心理学的検査結果からは遂行機能が保たれていた。地図や目印の掲示により自発的に目的地に向かう行動が確認でき、記憶補完のための道具を活用できる潜在性があると評価した。

【希望】 生活の自立と就労を希望。

【目標・計画】

毎日反復して記憶補完手段を用い、記憶を補完する行動が手続き記憶として汎化され、自発的な日常生活動作の自立。

①記憶補完道具の持参確認、②アラーム設定練習、③予定や重要連絡事項が随時記入練習、④日中活動の主体的な実践

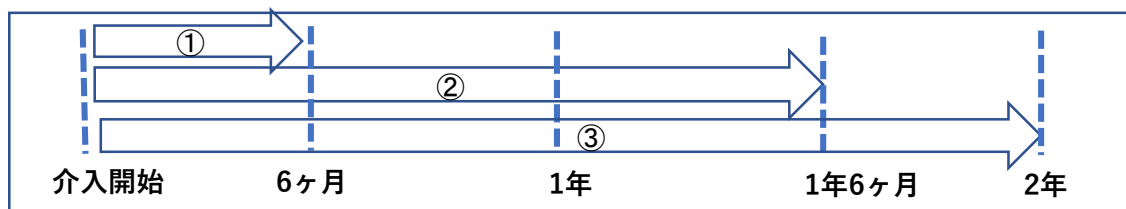
【介入・経過】

①生活の中でメモリーノートとアラームを携帯しているかを職員の確認下で継続。半年後、携帯自立。

②生活や訓練場でノートの持参と見返し、アラームの設定ができているかを職員が確認。持参と設定の定着を図る。

訓練や日課の終了後に自分でチェックを入れ、実施確認を行える支援を継続。毎日の朝礼の連絡事項は内容を要約し、ノートの記入欄にメモする練習を行い、エピソードの保持・再生の補助とする支援：1年半後に自発的な記入が可能

③日中活動(パソコン・軽作業・創作活動・スポーツ・一日の振り返り・SST)を継続し、2年後に就労移行支援サービスに変更。



【結果・まとめ】

24か月の生活訓練期間内で施設内の日常生活動作は自立し、自宅での生活管理は家族のサポートが得られている。次の段階は就労を目指し、就労移行支援を利用し、就労実習を実践している。

* 本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化 対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
-------------------	--------------------------	------------------	--

働く経験が主観的ウィルビーイングに与える影響

【年齢・性別】 40歳代・男性	【疾患名】 統合失調症	【手帳等】 精神障害 2 級
【全体像】 高校2年時退学になり、その後職を転々とするなかで独語妄想が出現。精神科病院へ短期間の入退院を繰り返しX年に当施設入所。服薬状況はCP換算値800mg。幻聴による奇異行動がある。 【評価】 日中は施設内を徘徊し、活動への参加はない。他者との交流なく、職員にも自ら声をかけることはない。SWNS-J（抗精神病薬治療下主観的ウィルビーイング評価尺度短縮版日本語版）：51点。 【希望】 暇を減らすために何か作業(仕事)をしたい。社会復帰(お金を稼ぎたい)をしたい。 【計画】 当施設にある就労支援継続B型に体験として週3回、1時間程度の仕事を行うこととし、報酬の支払いの調整も実施。体験を終えるごとに振り返りを行い、面談を実施。		

【経過①】 初回は指示が必要であったが、2回目以降は周囲を見て自身で動くことが可能。疲労感もなく楽しめている様子がうかがえた。本人も「作業が楽しい」「気持ちが良い」と述べる⇒施設内の活動へも参加。 【経過②】 1か月後、パン工房(社会適応訓練事業)の見学⇒好印象で「早く始めたい」と発言あり体験を週1回実施。体験利用中「覚えないと迷惑がかかる」と周囲を気遣う発言が聞かれ、真面目に作業に取り組む姿勢が評価される。作業能力も高く、集中して作業に取り組むことも可能⇒体験利用を8回実施後、本契約となり、週2回通所。

【結果】 5か月後 幻聴による奇異行動は消失。デイルームで他者と話す姿が見られ、必要時は自ら職員に声をかけることも可能。SWNS-J：51点→54点。 【まとめ】 働くことが決まってからは、不安定さが消失。働くことが自信と自己肯定感をもたらし、主観的ウィルビーイングに良好な影響を与えた。働く中で自分の能力や限界を感じ取り、自己能力の現実検討が可能になった。当事者の主観から得られる情報が役に立つことが多い。その一方、主観を聞き出すことが困難。自分自身で回復を実感することが困難だが、SWNS-Jは主観で評価をするため、回復を実感することが可能である。回復を実感することで、未来への生活へ希望を持つことができ、自己価値の再建へつながる。 * 本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。
--

【分類】 機能訓練/生活訓練	【分野】 身体/精神/知的/高次脳/その他	【形態】 個別/集団/連携	【内容】 生活機能の獲得・維持・向上/活動・社会参加の場の拡大/高齢化 対策/適応に向けた取り組み/環境調整/その他
生活のしづらさを可視化することで、趣味活動の再開や生活範囲の拡がりにつながった事例			
【年齢・性別】 40歳代・男性	【疾患名】 軽度精神発達遅滞	【手帳等】 療育手帳B	
【全体像】 中学校（特別支援学級）卒業後、靴屋やクリーニング店で30代まで勤めるも対人関係のストレスにより退職。その頃よりイライラ感が増加しX-4年A病院受診。以後通院しながらデイケア（以下；DC）に通所する。X-3年に希死念慮ありA病院入院。X年に当施設に入所。日中は無為に過ごすことが多かった。 【希望】 （本人） いずれ働きたい。グループホームに行きたい。（家族）自分でできることを増やしてほしい。 【評価】 作業遂行上の問題を共有するために実施した面接では抽象的表現の理解が難しかったため、作業機能障害の種類に関するスクリーニングツール（以下；STOD）を用いて、作業機能障害を評価した。合計46／84点（作業疎外20／24点、作業不均衡15／24点、作業周縁化7／18点、作業剥奪4／18点）であり、特に作業疎外（今していることに意味を見出していない）を強く呈していた。重症度5／5であった。作業疎外の対応として、STODマニュアルを参考に意思決定支援ソフト（ADOC）のpaper版を実施し、興味のあるものとして「散歩」「読書」を選択した。散歩は健康のためであり、読書は特にドラえもんの漫画が好きであることが確認できた。話をする中でDCに再度行きたい意向が聞かれた。			
【目標】 DCに一人で通えるようになる。近くの本屋で好きな本が買えるようになる。散歩に行く習慣をつける。 【計画】 ①主治医へDCの処方依頼し、DCまでの道を覚える練習を行う。また、デイケアに興味のあるものについて申し送りを行う。②近隣の本屋までの道を覚える練習をする。③週3回Nsと近隣の散歩を行う。			
【介入・経過】 デイケアは週2回の通所となり、3回程度道を覚える練習を行うと単独で行けるようになった。デイケアでは漫画を読み、カラオケにも参加するようになった。読書は、プログラム以外で自室にて漫画を読むようになり、散歩も継続して参加し、「楽しい」と話した。時々自らお菓子を買いに外出するようになった。			
【結果・まとめ】 STOD：合計29／84点（作業疎外10／24点、作業不均衡11／24点、作業周縁化5／18点、作業剥奪3／18点）重症度2／5であった。日中はデイケアに参加し、施設内でも漫画を読む等して主体的に過ごすようになった。 * 本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。			